論文審査の結果の要旨

氏名　　大山　潔

元代詩法叢書は中国文学史上、長く忘れられた著作である。そこでは具体的な詩の作法や、詩の歴史に関する議論など、作者や主題の様々に異なる文章が一書に収められており、大山氏はこのような書物を、中国古典の用法にならい叢書と呼んでいる。明代には元代の書をもとに多くの詩法書が出版されたが、明末以降、内容は浅俗で詩学的価値がなく、その多くは偽作であるとする見方が主流となった。近代の詩論研究においても、元は最も見るべきもののない時代とされ、後述する『二十四詩品』著者論争が起こるまで、専門家の間でも元代詩法叢書に注目するものは殆ど皆無という状態であった。

一方元明の詩法書は、我が国の五山の僧侶や李氏朝鮮の文人たちの間で尊重され、質の高い翻刻本が作られた。大山氏は日本国籍を取得しているが、本来は北京生まれの中国人留学生である。来日して研究を進める内に、日本には、中国では見ることの出来ない中国古典関係の書物が数多く残されていることを知り、各地の図書館で精力的に調査を行った。そして五山版と朝鮮版の元代詩法叢書数種を発見、さらに韓国でも調査を行い、資料を入手するとともに、李氏朝鮮に於ける中国文化の受容についても理解を深めた。本論でまず特記すべきは、著者自身が発見した日朝の書物をもとに考察を進めたことにあり、中国人学生が日本留学によって、日本と朝鮮をも視野に入れた新たな中国古典研究を行ったという点で、大きな意義を持つものである。

具体的な成果は、次の三点にまとめられる。第一は、現存するものでは唯一刊行年代が元代である、五山版『詩法源流』（1359年刊）を発見し、元代詩法叢書本来の姿を明らかにしたことである。とりわけ注目されるのは、この書は元代の文人杜本によって、詩法の普及を目的に刊行されたものである可能性を初めて示し、元代詩法叢書は、書肆が営利のために著名詩人に仮託した偽作であるとする旧説に大きな疑義を提出したことである。

第二は、朝鮮本『詩家一指』、朝鮮本『木天禁語』、五山版『詩法源流』に基づき、『二十四詩品』の著者と成書年代を考察したことである。『二十四詩品』は晩唐の詩人司空図の作とされ、中国詩論史上最重要著作の一つと見なされてきた。しかし、1994 年、この書は明の懐悦の作であるとの説が提出され、大きな論争を巻き起こした。大山氏は、懐悦説のみならず、最有力とされる元の詩人虞集の作とする説にも疑問を提起し、作者は不明ながら、元代以前の作であるとの見解を示した。

第三は、朝鮮本『木天禁語』にのみ含まれる杜甫の詩の注解『杜陵詩律五十一格』を詳細に検討し、この書の構成や注釈のスタイルが、従来知られてきたいずれの杜詩研究とも異なることを明らかにし、現存する最古の杜詩研究である可能性を示したことである。元代詩法叢書は、中国詩論史上の重要課題の解明に資するのみならず、中国文学史の再検討を促すに足る資料の宝庫であることが明らかに示された。

以上のような成果を持つ一方、本論には残された課題も少なくない。大山氏は細部の考証に熱中するあまり、しばしば議論が錯綜しがちな欠点を持つが、それを克服するためには、中国の詩史・詩論史に対してより一層の研鑽を積むこと、各国・各時代の出版事情に対しても理解を深めることが必要であろう。しかし従来はその存在すら予想されていなかった日朝版の詩法叢書数種を発見し、多くの新知見を提出した点で、その意義は極めて大きい。よって本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するものと判断する。